



愚直経営のススめ

第五回

持ち味を研ぐ

三村 邦久

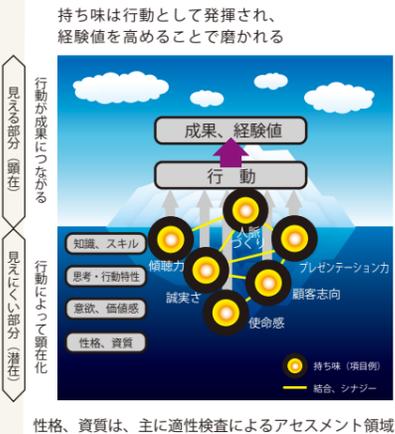
魅力の源泉

二〇二〇年に開催される東京オリンピックに向けていろんな話題が絶えませんが、主役は言うまでもなく世界トップレベルの選手たちです。国を代表して金メダルを目指す選手たちは、指し凌ぎを削る躍動感あふれる選手たちの姿は、我々に感動を与えずにはおきません。三〇年ほど前はアメリカとソビエト、東ドイッなど共産圏がメダルを二分している観がありました。例えば陸上を見るならば、短距離はジャマイカ、長距離はケニアやエチオピアのアフリカ勢が圧倒的に優勢です。

ウサイン・ボルト選手が「日本に体操や柔道があるように、ジャマイカには陸上がある」とコメントするように、それぞれの民族の持ち味を活かした競技で世界を獲り、自信をつけて国民の士気を高め、国を豊かにしていきたいという思いがあります。

を育てていくことが大切です。

持ち味の発揮プロセス (冰山モデル)



しかし、今の日本の企業の大半は、戦後の成功モデルである金太郎の社員を求める思考パターンから抜け出せていません。社員の評価制度は学校と同様に百点満点に近づくかを競う方法に止まっていきます。持ち味を發揮したかどうかより、何ごとも平均的に点を取る者が良い評価を受けようとするシステムであり、突出した持ち味を切り捨てていると言わざるをえません。

経営者の持ち味を發揮する

経営においては、経営者の価値観や性格、思考や行動特性で企業文化が形成され、独自性や優位性が作られます。ここで拙著『愚直経営で勝つ！』(PHP研究所)に登場いただいた経営者の価値観をご紹介します。

日本国内でも、地方の町おこしや今話題のふるさと納税では、その土地ならではの名産品をPRして地域を活性化しようとしています。私の故郷の兵庫県多可町には、酒米の最高峰「山田錦」誕生の地であることや、奈良時代に生産が始まり鎌倉幕府の公用紙となり、現在では「宮中歌会始」で使われている和紙「杉原紙」などがあります。最近ではTVや雑誌などで取り上げられ、故郷の良さが広く知られることは嬉しいことであり、誇りでもあります。

また、会社経営においても、会社がつ持ち味を活かした商品やサービスは、魅力的で持続的な競争優位性につながります。

持ち味とは

持ち味とは、誰にでも生まれながらに備わっているもので、十人十色です。ある人の性格や思考・行動特性の中で、何か特徴

う。「仕事とは、一生かけて命をかけて心底熱中する遊び」(好奇心を持って仕事を探求する)「濡れ雑巾経営で自由の最大化を実現する」(出る杭を伸ばし創造性で勝負する)「人に尽くせることが真の幸せ」(人格を磨き、長期的な信頼関係を育む)「何があっても正しさを実践する」(不正や邪なことをせず、枕を高くして寝る)「多樂スパイラルで生きる」(すべての判断基準は楽しいかどうか)「Good People Company (人間の尊厳、美点を見つめる)」「万人万物共存共生」(宇宙・地球と共に生きる)など、多種多様です。

経営者にはそれぞれの哲学や世界観があり、いずれも魅力的で優秀などつけようがありません。それが企業活動の持ち味として表れ、それぞれがオンリーワンなのです。明確な軸があつてブレない。途中で投げ出したり逃げたりしない、一貫性があつて信頼性が高い。手間を惜しまずコツコツとプロセスに手抜きがない。これは、持ち味を發揮するからこそできるのです。

自己表現する喜び

四書五経の一つ中庸には、「天の命ずるこれ性と謂い、性に率うこれ道と謂い、道を修むるこれ教えと謂う」の一節があります。その意味は、人にはそれぞれ持つて生まれた天性や持ち味があり、それを活かしていくことが人としての正しい生き方である。

的であつたり、しぶとかつたりする部分。強みや良さと言うより、長短表裏一体となつたものであり、「良い方向に發揮される可能性がある個性」ではないでしょうか。

野球なら、俊足を活かして盗塁を成功させた選手を指して「持ち味」を活かしたと褒めます。大柄のホームランバッターもいれば、小柄で送りバントの得意な選手もいる。本格派の剛腕投手もいれば、打たせて取る〆知能派投手もいて、いろんな組み合わせがあるからこそ面白いのです。

日本料理には、素材の持つ本来の味、香り、色、食感、そして四季おりおりの旬の食材を活かす、そしてヘルシーであるという持ち味があり、世界各地でファンが増えってきました。

大切なことは、一人ひとりが自分や組織の持ち味を知り、發揮したなら、成長可能性とチャンスはもつと拡がるということです。自分らしくイキイキ働いて、他にない独自性を發揮できます。そして、社会が必要とする輝く人や組織になれます。

冰山モデル図は、持ち味の發揮プロセスを概念化したものです。水面下や内面にある持ち味は行動によって顕在化していくのです。単独で發揮される場合もあれば、他の持ち味と結びついて發揮される場合もあります。持ち味を活かすには、持ち味を自覚し、繰り返し研ぎ澄まし發揮することで経験値を高め、自分らしさ(特徴、強み)

正しい生き方を極めるために常に持ち味を研ぎ澄ましていかなければならない。また、論語には「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」とあり、朝にどう生きるべきかを悟ることができれば、夕方に死んだとしても後悔はない。つまり、一生かけて生き方を極めていくということが人生の目的であると説いています。

経営者や管理職は持ち味を活かしたリーダーシップを發揮し、社員もそれぞれ持ち味をそれぞれの業務に活かす。自分なりの工夫を凝らし、自己表現することは人間の大きな幸せでもあり、人間の尊厳を守ることに必要になります。

これからの時代は、価値観や性格に合った仕事に就き、得意な技能を活かし仕事に没頭する。自分の持ち味が發揮できる土俵で勝負するなら、優越感と自信が持てて、良い結果が得られるでしょう。壁にぶつかつても、苦勞に耐えられるでしょう。一生かけて、自分の世界観を表現する働き方、加えて、人の持ち味を活かす組織のあり方を追求していくことが我々の使命なのではないでしょうか。



神奈川県横浜市長

三村邦久(みむらくにひさ) / 一九六一年、兵庫県生まれ。株式会社アイパートナー代表。中小企業診断士。著書に『愚直経営で勝つ！』(PHP研究所)。